子どもたちの生活と音楽

講師

平井 恭子 京都教育大学幼児教育科 教授

1. はじめに

私は、岡山県倉敷市の出身です。幼いころは、教会の中にある幼稚園に通っていたため賛美歌や教会音楽に触れる機会がたくさんありました。子どもなので歌詞の意味は分かりませんでしたが、その時に聴いた美しい旋律やハーモニーは今でも心に残っており、音楽の勉強を始める動機となりました。その後大学では幼・小の教員免許を取得し、大学院では音楽教育を専攻しました。大学院2回生の時、ヨーロッパ(ハンガリー、オーストリア、ドイツ)の教育現場を視察し、自国のことばや伝統的な音楽が、音楽教育の土台としていかに重要な意味をもつのか目の当たりにし、その後の研究活動にも大きな影響を与えました。

大学院修了後は数年間、幼稚園教諭として勤務し、その経験を生かして大学や短期大学、専門学校で保育者養成に携わるようになりました。京都教育大学には2001年に赴任しましたが、2003年に渡米し、リトミック指導者として世界的に有名なリサ・パーカー先生のもとで学ぶため、ボストンに数か月滞在しました。2004年以降は、自身の子どもを研究対象に、0歳から5歳までの音楽的成長を記録し、研究成果を『音楽的な遊びに見る乳幼児の発達』(新宿スタジオ)としてDVD4巻にまとめました。こちらの方は、機会があればぜひご覧ください。

最近では、2018年4月から2022年3月までの4年間、京都教育大学附属幼稚園で園長として勤務しました。その時の体験も交えて、音や音楽が乳幼児期の子どもたちの成長発達に如何に関わっているか、を中心にお話させていただきたいと思います。

2. 世界中で子守歌が歌われる必然性

サルと人間の赤ちゃんは、子育てのスタイルが大きく異なります。その一つとしてサルの赤ちゃんは生まれてすぐに母親にしがみつき、自力で動けるようになる生後3か月頃までは母親が子どもを24時間抱いて育てます。しかし、人間の赤ちゃんの場合、生まれたときは首が据わっておらずしがみつ়く力もありません。そのため、サルの赤ちゃんのように四六時中親と一緒に行動するわけではなく、基本的には親の身体と離れて過ごします。そこで、「ママはここにいるよ」と、愛情をこめて子守歌を歌ったり語り掛けたりすることが赤ちゃんに安心感を与え、親子の絆を繋ぐ上で非常に重要だと考えられています。

生後3か月の赤ちゃんは親が歌う『ぞうさん』にどのように反応しているかについて、以下の3つの視点から、映像を見てみましょう。

- ① この月齢でコミュニケーションは見られるか。
- ② 見られるとしたらどのような手段でコミュニケーションをとろうとしているか。
- ③ 赤ちゃんは音楽を感じているか、感じているとしたらなぜそのことがわかるのか。

母親が、赤ちゃんに向かって童謡の『ぞうさん』を歌いかける動画を見る。

母親が歌い始めると、赤ちゃんは母親の目をしっかり見つめ、満面の笑顔で反応しています。1番の歌詞をじーっと聴いていた赤ちゃんは、2番の歌詞にさしかかると、今度はお母さんの歌声に重ねるように「あー」と柔らかい声を出して反応しました。赤ちゃんと養育者の間で見られる、こうした歌い合いは、共感的で同調的なコミュニケーションと言えます。マロック

とトレバーセン(2009)は「Communicative Musicality」(日本語訳「絆の音楽性」)の中で、母子関係において音楽的特徴のあるコミュニケーションが、人生の非常に早い段階で認められることを多くの研究を挙げて述べています。

また、親しんだ音楽は社会的選好をもたらすことも、近年の研究から明らかになっています。生後11か月の子どもに、1～2週間、母親が毎日ある歌を歌い聞かせ、その親しんだ歌を歌う人と、全く知らない歌を歌う人が、それぞれぬいぐるみを差し出すという実験を行いました。その結果、子どもは、高い割合で、親しんだ歌を歌う人の方に手を伸ばしぬいぐるみをもらいました。つまり、自分が親しんだ歌を歌う人に、子どもは親近感を抱くことが分かったのです。また、話しかけより歌いかけのほうが赤ちゃんの機嫌を長く保つことも分かっています。親が赤ちゃんをあやすとき、しばしば無意識にリズムカルに体を揺らすことがあります。音楽を奏でること、歌うこと、体を揺らすことは、赤ちゃんの気持ちを安定させる上で効果的であることが科学的にも明らかになっています。

3. 子どもの表現はいつどのように生まれるのか

京都教育大学附属幼稚園で園長として勤務していた間、幼稚園の生活の中で子どもの表現がいつどのように生まれるのか、について観察してきました。そこで、私が見てきた事例の中から、以下の4点についてお話ししたいと思います。

- ① 音との出会い。子どもはどんな音に興味を示し、どのように音を探索しているのか。
- ② 歌はどのようにして生まれてくるのか。子どもが遊びの中で即興的に歌う歌は、いつどのようなタイミングで生まれてくるのか。
- ③ 西洋音楽が溢れている現代、子どもは、わらべうたをどのように遊んでいるか。
- ④ 豊かな表現を育むために、保育者は、どのようなことを心がけるべきか。

① 音との出会いについて

生活の中で子どもたちは、いろいろな音に出

会っています。音を聴いて「面白いな」「不思議だな」と思うと、子どもは、どうしたらその音が出るのか、違う音を出すにはどうするのか、についていろいろと試行錯誤したり探究したりします。幼稚園教育要領には『豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。』『その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。』と書かれています。

それでは実際に、身近にある音に気付き、音を探索している子どもの姿を見ていただきたいと思います。

4歳児が、スコップですべり台の斜面を叩きはじめ、近くの友だちもそれを模倣して2人が互いに意識しながら音を出し続ける場面の動画を見る。

音は目に見えないので、子どもたちが音を探したり、音を見つけたりする姿を見つけるのは、非常に難しいですが、映像で見るとよくわかります。この場面では、どのような音が面白いと思って滑り台を叩いていたのでしょうか。二人で交互に叩き、音が切れないように続けることを楽しんでいたように思います。最初に叩き始めた子どもは、リズムパターンを繰り返しており、もう一人がそれに合わせて音を出すなど、お互いの音をよく聴きながら、楽器遊びのようなリズム遊びが成立していたことが分かります。

数名の3・4・5歳児が、鳴いているニワトリに向かって呼びかける場面の動画を見る。

「コッケコー」というニワトリの鳴き声が、子どもには「まったねー(また今度ね)」に聞こえたようです。「まったねー」と言ってニワトリの返答を待ち、友だちと声を合わせてリズムのある声かけを繰り返していました。

写真を見ながら、子どもたちがいつどのように音と出会っているのか、話を聞く。

その他にも様々な音との出会いがあります。

例えば…

- ・おもちゃが斜面を転がり落ちる音を繰り返し楽しむ子ども。
- ・たくさんの氷をバケツに入れ、スコップで砕く音からかき氷のイメージを広げ、かき氷屋さんごっこに発展していった保育実践。
- ・雨の日は、雨粒が何かに当たると音がするので音との出会いが豊富。樋から落ちる雨水に傘を差し掛け、振動とともに音を感じている子どもの姿。
- ・草笛を鳴らすときに、自分の口からピーと音が鳴ったことに感動して、鳥になったように両手をはばたかせながら、みんなに草笛を聞いてもらう子ども。
- ・園外保育で、砂利道を歩くとき足の裏全体を擦って、ジャリジャリとわざと音を立て、足の裏全体で音を聴いている3歳児の姿。
- ・大雨の後にドロドロになった園庭で、手で泥をたたいて、音を楽しむ子どもの姿。手のひらで音を聴いている。
- ・蝉取りをするときは、蝉が大合唱をしても木の葉が茂っていて何処に蝉がいるかわからない。しかし、子どもは、何処からセミの鳴き声がかかるか集中して耳を傾けている。
- ・電車が好きな3歳児の事例。電車の発車音の変化など細部まで聴いて、区別していた。
- ・銀杏を炒めるときのはじけた音を、「花火みたい」と自分の生活経験と結びつけて聞いている。

以上のことから、子どもと音との出会いにどんな特徴があるかまとめてみましょう。

- ・興味をもっているときは、何回も繰り返して試している。
- ・目的があるとき、より注意深く聴く。
- ・好きなことは、再現できるほど、非常に細かいことまで聴く耳ができています。
- ・砂利道歩きの例のように体全体を使って(足の裏、手のひら、など)、音を感じ取っている。
- ・石ころをたたいてその音の素敵さに気がつくと、友達にその石をプレゼントする遊びも始まる。

といった、子どもの姿がうかがえます。

② 歌がどのようにして生まれるか

人に強く伝えたいときに話しことばがどのようにうたへと変化するのか、動画を見ながら考えてみましょう。

泡がたくさん入ったバケツにアヒルのおもちゃを入れて遊んでいる友だちに、おもちゃが欲しい思いをなかなか伝えられない3歳児の動画を見る。

おもちゃのアヒルが欲しいけど、その思いをなかなか伝えられないとき、「♪くーれないかな」とメロディをつけて伝えました。すると、相手はすっとアヒルを差し出してくれました。「♪ありがとうー」と、またメロディで思いを伝えています。

4歳児が泥団子を作っているときの動画を見る。

子どもたちが泥団子を作っているとき、次第に団子の形ができてくると楽しくなってきた、自然に歌が生まれます。「♪だるだる～」と団子を丸めながら一人の娘が歌い始めると、そばにいた男児が「♪お団子、おいしい、おだんごやさ～ん」と、別の歌を歌い始めます。このように一人が歌うと、歌いたい気持ちが友だちに伝染し、広がっていきます。

この事例のように、喜びが心の中から湧き上がるような体験が表現の土台になっていると思います。自然に歌が生まれるほど楽しくなる遊びや環境を用意することが何より大事です。

二人の子どもが、牛乳を入れたコンテナボックスを運んでいる動画を見る。

この場面では、足取りを合わせる必要感からリズムカルな掛け声が生まれています。「♪おもい・かるい・おもい・かるい」と掛け声をかけています。

他にも、おひさまグループは「♪えっさ・おひさま」という掛け声をかけたり、直前まで猫ごっこをしていたグループは「♪にゃんにゃん」と猫の掛け声をかけたりするなど、時や場に応じて、オリジナルな掛け声が生まれてきます。

二人の子どもが、交互に唱える動画を見る。

仲良しのユイカちゃんとコトノちゃんが「ユイカちゃんときょうだいみたい」「コトノちゃんときょうだいみたい」と、片足でジャンプしながらリズムカルに唱え合っています。何度か試行錯誤するうちに、互いにタイミングを計りながら音楽的なやりとりを成立させていきました。

同じリズムによって動くことがもたらす影響に関する実験では、子どもは、自らの動きと同期して動く人に高い割合で親近感を感じるという結果が出ています。息を合わせて一緒に歌ったり踊ったりするということは、単に楽しいだけではなく、心の絆を繋ぐことにつながるのです。

③ 子どもたちはわらべ歌をどう遊んでいるか

鬼を決める時、じゃんけんではなく、わらべ歌を唱えて決めることがよくあります。「おにきめ、おにきめ…」「いろはにほへと…」などの唱えことばを唱えることは、どきどき感があり、子ども集団の結束力を高めます。そして、替え歌にするなど自由に作り変えられる良さもあります。

保育者と子どもが、数名で大縄跳び「なわとびしましょ」で遊んでいる動画を見る。

保育者がうたう「♪○ちゃんがいります、ぺったん、ぺったん、ぺったん…」という歌に合わせて、子どもたちが大縄に入ろうとします。間をあけないでタイミングよく縄に入っていくのは難しいのですが、困難に直面すると、子どもたちは次々とアイデアを出していきます。別の遊びをしていた子どもたちも周りにやってきて、全身でリズムをとりながら応援しはじめました。年長の最後の時期になるとみんなで共同して目的意識をもち、試行錯誤する姿が見られるようになります。このような姿は、小学校へと続く主体的・対話的で深い学びの始まりです。

わらべ歌は、情緒の安定、日本人の持つアイデンティの育成、社会性、運動機能の発達などいろいろな側面に良い影響を与えます。人とのつながりが希薄化しがちな今の時代だからこそ、わらべ

歌を今一度、幼稚園・保育園の生活に取り入れてほしいと思います。

④ 教師に求められる資質・能力、豊かな音楽的環境をいつどのタイミングで与えるのか

数名の子どもが、大きな段ボール箱を棒で叩いて遊んでいる動画を見る。

箱を棒で叩いて遊んでいたとき、一人の子どもが「だん、だん、だんだんだん」とリズムののって叩き始めました。それを見た保育者が足早に近づき、子どもが叩いた音を「○ちゃん、さっきの口で言ってみて」と投げかけました。叩いた音を口でいうことで子どもは意識化できるのです。「○ちゃんの（叩いたリズムを）みんなでやってみよう」と保育者が投げかけたことで、みんなの遊びへと広がっていきました。子どもの気づきを見逃さず、探究心を導き深める保育者の存在は大変重要です。

このクラスは、段ボール太鼓の遊びを深めて生活発表会につなげていきました。生活発表会は子どもが考えみんなで作り上げたものを見ていただく機会にしたいものです。子どもの思いやアイデアが生かされることで「自分たちで作ったんだ」という自信につながっていきます。子どもの生活の中から生まれた表現を、いかすことがとても重要だと思います。

他にも、季節の歌を友だちと共有する喜びや、年齢や発達に応じた遊び、子どもの生活に沿った遊びや音楽、いろいろな楽器に触れる機会を大事にしてほしいです。また、情報機器を活用することで、普段の生活では得られないイメージをもつことができ、表現の可能性が広がります。

最後に、子どもたちは先生の声や表情からたくさんのお話を学びます。それぞれの園で子どもたちの豊かな表現が広がるよう、先生方の創意工夫を期待します。

その後、受講者全員で、実際に体を動かして音楽あそびを楽しみ、実践に生かせる研修となりました。

令和6年度第4回共同機構研修会
令和6年7月11日開催
於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館